

## ものの背後 … 多様の中の単一 …

山口博永道長

ものの背後には深く隠された秘密がある真実は単純にして美しい(アインシュタイン)

科学者アインシュタインが自ら自然界を観察して、天地宇宙の真相を直感し予言(仮説)した言葉です。

それから数十年の今日、実験装置の開発と共に実証(検証)されました(量子力学)  
大事な事は、この予言は迷信ではなかったという事です…！

ところで、直感した科学者アインシュタインは確かに偉大であります、それよりも現代の私達の日常を省みて、見過ごしてはならない重大なメッセージがこの言葉に提示されております。

人類が幸せを求めて築いてきた文明が、情報と物質の氾濫した社会を生み出しました。  
その結果現代病と言われるストレスからくる病が蔓延し、必然的に人間としての尊厳も失われました！

この本末転倒な社会にあって、アインシュタインのこの啓示は、私達人類のこれからの生きる指針とならなければならないのではないのでしょうか。

それにしても、ものの背後とは…！

これをどのように理解すれば良いのでしょうか …。  
私たちの自然界は確かに美しく素晴らしいものです…  
しかし時には牙を剥いて我々人類に襲いかかるのもまた自然です…  
その悲惨な現実をみれば、結局私達の思い通りにならない！…  
それが自然であり、それは無秩序で混沌としたものではないのでしょうか … ！  
それをアインシュタインはどのように観察して秩序ある美しい世界であると言うのでしょうか…

そもそも背後とは、その秘密とは何なのか…！

それは私達の想像もつかない何か意志のようなものが背後で働いているというのでしょうか…  
もしこれを知ったら、この現代文明がどのように変わるのでしょうか…

アインシュタイン、曰わく！真実は単純にして美しい ……。  
確かに人間は複雑を嫌います… :一つ: があって、その一つが人間の生きる全てを満足させるならば、その一つこそ人類最高の理想であるはずでしょう …

その証拠に人は名利、(権力、金)を求めます…それでもそれらは不安定で満足出来るものではない事を私達は承知しております、

しかし今はそれを取って代わるものがない…  
そこで本当に信頼に値する :全一: なるもの、それを人類が獲得出来れば、人は安らぎ、全てが安心できるはずです。  
全一 なるもの、それは有るのか …  
:単純にして美しい: それは如何なるものなのか …!!  
…想いは尽きない。

私達を包み込み…無限に広がるこの宇宙!  
…太古の昔、自然界は現代とは比較にならないほど、ダイナミックな開展であった事が想像できます。  
未だ科学的知識も無いその時代の人々は予測を超えた自然の運行に畏敬の念を覚え、これを受け入れ、問い続けたことでしょう…  
これは何!なぜ!と…  
…人類にとっても、この厳しい現実を解明できなければ人間の尊厳は保たれず、安心した生活はできなかったはずです……!

そこで東洋の先人達も、いつの時代にあってもこの世界の真相を懸命に追求し探求して参りました。  
その結果多くの解答が得られ、時代と共に洗練され、深められていきました。  
今から三千年の昔には、ついに納得出来る原理に到達したのです…。  
… 不可分にして永劫不変なる解答が得られたのです。  
それはこうです。  
《すべては、完成され、永遠に安らいでいる》  
というものでした、人類にとって最高の理想が得られたわけですから… !  
そして、奇しくも近代の科学者アインシュタインの…『ものの背後に真実がある』… という言葉によってよみがえったのです…。

それにしても東洋の哲理のその内容は、現代科学の想像をはるかに絶する深遠なる内容で説き尽くされています  
…これに対して近代科学者は正直驚きを隠し得ない! …、

何故ならば科学は迷信を打破する事を使命として、進歩発展してきたはずなのに、その科学が、ようやくにしてたどり着いたのが、東洋神秘主義と、あたかも迷信の権化のごとくに扱われていたその門であったのです。

しかも科学者達は自らの手でその扉を開くことになるのです……………。  
そして言います…

その中に分け入れれば入るほど、東洋の：原理：が科学のそれよりも、もっと直接的であり、実際に迫って来る：！…と

当然のことながら、この原理は考えて行き着いたものではなく、精神統一という実践の法をもとにして解明されているからです…。

それ故に又、すべての人々が同じ実践の道を歩みさえすれば、等しくそれが体現出来るはずで  
す。

それが今日まで我々に伝承されているものなのです。  
… 剣道、柔道、茶道、華道、の：道：の名の真意はここに有ります。

この道を通じて誰でも、理と実践の：法：を誤らなければ、全ての人は同じ目標に到達するとい  
うものです…。

先人曰わく…『 私達の日常は、表面的に見れば、物に囲まれた世界であり、日々目の前の出来事に執らわれております…』

しかしその内要を良く理解すると、その成り立ちは相対的な関係によるものであり、私達の日常はその二力の作用にしっかり縛られていることに気づかされます。

人は 束縛は嫌いです…！

そこで人々は、損得や、善し悪しを分別し、どちらか一方を執て楽になろうと努力をします…、その思いは決して悪い事ではありません。

しかしその考え方と、手段に誤りがあります。

… それは、外部のものを利己的に分別し、どちらか一方を選び好みすることで、陰陽二力の法則に反してしまうからです。

実は陰陽は別物ではなく切り離せない一対のもの、一つの働きの異なった姿なのです。  
それ故に、：求不得苦： … 求めても得られないということになります。

これが陰陽二力の：魔力：で、この魔力から逃れる事は容易では有りません…

そこでこの二力の作用を調える理法を学ばねばなりません。

それを：道を歩む：というのです。

その要は、『外部に目を向けずに自分自身の内を観ることに有る(自分を学ぶ)』ということで、

内観しなさいというのです。

そしてその：道：の理解を深めるには、理の分析と先人達が歩んだ足跡をたどる事が重要なのです。

我々拳士の学ぶべき理は・・・

：人人各居一太極：・・・と説かれ、本来全ての人々は太極という完成された姿であるというのです。

そしてそれを理解する極意は、：陰陽が分かれる以前の世界に帰る事にある！

：要は・・・ 陰陽は別物では無く、バランスの問題にあるのです ！

しかしこれがなかなか至難のわざで、自意識すなわち頭では絶対に解決出来るものではありません。

実参、実求あるのみである！

幸いに、現代もその実践の法が明らかに伝わっております。

私達 太極拳を学ぶ目的も実はこの 理と 実践 を学ぶ事、それ以外の何物でもなかったということですから … 。

馮志強老師曰く …

『心を穏やかに、気を静かにしてゆっくりと鍛錬する事を心掛け、外形動作がゆったりと転移していくにつれて、内気を体内のすみずみまでめぐらせる。

(1):その自然の運行を聴き …

(2):その自然の機を会得し …

(3):その自然の道と一体となる … そして徐々に

(4):物我両忘の境地： その境地へと入っていく。そこにはただ

(5):中気： だけがあり、

(6):虚霊を内に含んで、一片の太極原像が立ち現れてくる：ことになるのである … と 。

(1)自然の運行を聴く …… 。

太極拳の練習は形を学ぶ段階から始めます。

まずは一つ一つの形を師について正確に学びます、これは有形の段階です。

次に形の部分的な練習は止めて、一つの形の終わりが次の形の始めとなるように、始めの起式から終わりの収式まで途絶える事無く終始一貫して練り上げます。

これは有形から無形に至る為の練習であって、太極拳はこの鍛錬が非常に大切な意味を持っており、太極拳の持つ素晴らしい特徴なのです。

そして全ての動きが円運動になるように練習を重ね、全体よりも円滑な動きを会得して行きま

す。

この段階は師の動きを見ながら外形を調べていきます。

しかし未だ内部感覚がはっきりとせず外形が主となる練習なので、…宮本武蔵の云う:見の目:の段階といってもいいでしょう。

見の次は:観:です。

観とは、内面を観察するという事で、それは単独で練習をする時間を多くとりながら、師の動きをイメージして自分の動きと摺り合わせ、その違いをよく理解し、考えて練習をします。

そして動きに慣れてきたら、外形に捕らわれず、動作の開合、虚実を重んじて、同時に呼吸と合わせ意念を深めてゆきます。

それは内なる気である:内勁:を引き出すことを目的とします。

これを…外形をもって内勁を促す…と申します。

(極意は横隔膜の開合にあります、これは呼吸と動作の事柄で、ある意味、口伝でなければ伝えることは出来ません)

この練習の熟練において動作の始めから終わりまで、気が全身を貫くようになるのです。

ゴツゴツとした個体的な外形がその熟練において、気の体となり全身の経絡に沿って、あたかも水の川の流れの如くに観察できます。

それでも初めのうちは気が障害物…(体のこわばり等)…にせき止められて流れにくく、練習は困難を伴います、多くの人々はこの段階において自らの練習がマンネリと化し、気が理解できないままに止めてしまいます。

しかしそれにも、めげず、挫けず、あきらめず、… 良き友を求めて、より多くの反復練習と、良き師の忠告に従っていよいよ気の流れが勢いを増し、いつしかその障害物を押し流してしまいます。

そこで、気の路に障害物が無くなったとき、陰陽の二気が調い、一気となって全身を貫くのです！

:一気貫通:そしてこの気の流れと心が一つになる時、

(1)の:運行を聴く:と申します…。>>これが無形の段階なのです。

しかし、一気貫通したといっても、套路は一本調子であって、動作は自由であり得ても時と所に従って自在とは言えない！…

すなわち意は気に従っても、気は意に従えない…

それゆえ外境に対して盲目的である。…

次にこの段階から推手などの対練により13勢と、纏シ勁の意味を良く理解しなければなりません。

そして更なる鍛錬を重ねた結果、…

13勢が意念と化し！

無意識の内に、動作に連動して、現出する外部気配と、それに即応した意念から緩急自在な動きが生まれる(内外の一体感から、活殺自在の趣がある)…

これが

(2)の…自然の機を会得する…という事であって 外界の虚実動静との合一が理解出来てきます。更に深めて行くと

(3)…自然の道と一体となる…

いつしか外界との合一から自分を忘れ、外が内に入って外部感覚が薄まり外を内部に観る感覚が生じてまいります、

それは、正しい意念の持続力により、人間の本来持つ…外に自分とは別物を見る分別意識が弱まり、それに伴って内外の境界線が無くなり:内外均等:となる…

これは作為的、人為的な工夫では無く、ただ正師のもとで

…聞、思、修…正しい理を聞き…分析し

…日々地道な反復練習の賜物であり、

その練習の最中に実感し、体現して行くものなのです:無心に帰る:とはこの事を言うのです！

この鍛錬、練功は万象との一体感を深めます。

更に鍛錬を重ね、開合虚実から放松、放松より虚霊を生み出し天地が同根(体内の気が、上虚下実に分かれ、しかも一気で繋がる)となって、そこに太極が現象する。

『ここで、最近私が会得した状態を申し上げます。

体内の気が水の流れから波のうねりとなって、線から面、更に球と化してまいりました。それは天地一気を極めた事によって…、

ひとたび動けば十方に開き、合わされば深く胆田に沈む！

…意念となった13勢は、虚実を伴って全身に纏わり八方に引き合う

…開中合、合中開、それは開合合一して逆らわず、

無為の従…流れに随って去るという:運氣:が理解できました。』

## 太極の氣象とは

自らの潜在世界を突き抜けて、… 見から観に 更に 観の観、見る者の背後にあって知るとい  
う無分別智…究極的な:観:

… この観は、積極的に 天地と我との合一を知らせ、消極的に

(4):物我両忘 :を覚える、これが

(5):中:の世界観であり… 中気、中道とも申し上げます ……。

そうなのです！！ ここにきて正に、アインシュタインの言う『ものの背後に隠された秘密』を知  
るのです。

それは、矛盾の中に統一 を観る、多様の中に単一を知る、:中:の世界観に他ならない！

そしてそれを万人が体現出来る事を 太極拳も段階を追って教えるのです。

## 最後に

(6) 虚霊を内に含んで一片の太極現象が立ち現れてくる

《今…私はこの言葉のなかに、我が参学の人生40年の想いとその結果が込められている事を知  
ります … 》

これが陰陽の活三昧、太極無限……陰陽差別が太極絶対となり、太極絶対が陰陽差別と遊  
ぶ …。

平等即差別、差別即平等 …これは人知を超える

しかし難しいものではありません！

なぜならば古人は :人人各居一太極:と諭され証明される。

:内に含み、立ち現れてくる:… とは、 虚空ついに内外無し… その気分は無条件に楽しい！

《11月の合宿はこれを教材にします。》